

「リレー小論文」を書く

◇小論文の文例（I大学の大学生の分担執筆による）

▼基本的な枠組（四つのトピック・センテンスで段落を構成）

- ①序論（問題点の指摘）
- ②本論1（予想される反論）
- ③本論2（再反論）
- ④結論（提言）

※各段落の冒頭にトピックセンテンスが配されている点に注目！

【文例1】

▼要旨（アウトライン）

- ① I大学は孤立している。
- ② 確かに楽園とも言える。
- ③ しかしその環境が社会に適応できない。
- ④ だからコミュニケーションの場を提供する努力を大学は行うべきだ。

▼本文

I大学は孤立している。なぜなら、学校の環境が学生を大学外との交流から遠ざけているためである。キャンパスが都会から離れており駅からも遠く、アクセスが悪いため、学生が大学から出る場合にとっても不便である。また、三学期制や少人数制、メジャー制度など学校の制度が他の大学と異なっているため学外の人と分かり合えない。言わ

ば、I大学は陸の孤島となっている。

確かに、楽園とも言える。問題点として挙げられる立地や制度も、見方によってはI大学を楽園とさせる重要な要素である。例えば、このような立地だからこそ、I大学の自然豊かなキャンパスは成り立っている。都会の喧騒から離れ、のびのびと自然の中で過ごす時間は、まさしくここが楽園だと感じる一時である。また、少人数制教育や三学期制度は、学生同士の結びつきを強めている。少人数で三学期制度だからこそ次々と広がっていく輪は、I大学での生活をより豊かに、より居心地の良い楽園空間にするのだ。

しかし、その環境が社会に適応できない学生を輩出してしまう。学内のみでの深いつながりと学外での交流の少なさが閉じた環境を作り出している。それが学生を井の中の蛙にしてしまい、学外とのコミュニケーションを苦手にしてしまう。大学生活をこのような環境で過ごすことよって、就職活動や卒業後も社会への適応に苦労するだろう。孤立した学校空間が学生を社会不適合的な性質にしてしまっている。学問に集中でき、学内で深い交流ができる環境が社会に適合できない学生を生み出してしまうのならば、社会人になる準備期間を過ごす大学として致命的な欠陥である。

だから、コミュニケーションの場を提供する努力をI大学は行うべきである。例えば、他大やOB・OGとの交流会を行うなど、社会と接点を持つような場を大学自体がもっと積極的に作るべきである。それこそが、I大学を「孤立した大学」から「繋がり深い大学」へと、真の楽園へと変える、大事な一歩となるだろう。

【文例2】

▼要旨（アウトライン）

- ① I大生は自己主張が強すぎる。
- ② 確かに、周りに流されず自己主張をする事は大切だ。
- ③ しかし自己主張が強すぎて他者と協調しないことは問題だ。
- ④ だからI大生は自己主張するだけではなく、他者と協調する術も身につけるべきである。

▼本文

I大生は自己主張が強すぎる。なぜそうなのか。それは、I大学が重要視するCritical Thinkingを「批判的思考力」と和訳し、言葉の意味を文字通りに解釈しているからである。つまり、ただ他人の事を批判すればよい、と思いつみそれを実行している者が多い。結果、自己主張が強くなってしまふ。

たしかに、周りに流されず自己主張をすることは大切だ。日本人は自分の意見が言えない、と評されることが多い。マジヨリテイの流れに合わせ、波風が立たないように振る舞うことが美德とされることも少なくない。これは、協調性に優れた日本人、という評価と表裏一体なのだろう。しかし、協調性を追求するあまり、周りに合わせすぎてしまい、主体性が失われてはいけけない。受動的な人間になってしまつては、自分らしさを表現できなくなってしまうからだ。すなわち、受動的な人間になることは創造性の欠落に繋がり、人としての成長が止まってしまうことにも繋がる。一人の人として何かを発信し続けていくことは、その個人だけではなく、コミュニティや社会、引いては国家を発展させることにもなるだろう。以上のような理由から、信念に

基づいた自己主張をすることが大切だと言える。

しかし、自己主張が強すぎて、他者と協調しないことは問題だ。他者の意見を全く耳に入れず、ただ自分の意見だけを押し進めるならば、その主張は自己満足から生まれた主観的なものでしかなくなってしまう。そして周囲の反感を招き、やがて孤立してしまうだろう。I大学には、「自分の意見を持つこと」や「クリティカルシンキング」と、このような「他者の意見を聞かず自己主張を押し通すこと」を取り違えている人が多い。あるI大学の宗教の授業でのグループディスカッションを例にあげよう。あるテーマについて意見を出し合い、グループでまとめて発表する、というディスカッションだったのだが、誰が何を言っても、ある人が「でも、それは・・・だから違うよね?」「その根拠はなに?」と批判し、最終的に自分一人で勝手に結論を出して発表してしまったのだ。他のメンバーは哑然としたまま、ディスカッションではなく「批判」をされただけで終わってしまった。その人は「クリティカルシンキング」を実践したつもりでいたようだが、これでは他者の主張を尊重せずに、ただ自分の意見を押し付けただけにすぎない。自己主張も確かに大事ではあるが、時には他者と協調することも必要である。

だからI大生は自己主張するだけではなく、他者と協調する術も身につけるべきである。例えば、まず他人の話をきちんと聞く姿勢をもつ事も一つの方法である。自分の考えのみを正しいと思うのではなく、他人の意見を聞き、尊重する態度を持つのである。そうする事で、自己と他者と協調する術が身に付いていくのではないだろうか。

太宰治の「走れメロス」―セリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場しているのはなぜか。(留学生による小論文推敲例)

要旨

- ① セリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場しているのはなぜか。
- ② 第一の理由は、メロスの邪魔をさせて、物語を盛り上げるためである。
- ③ 第二の理由は、セリヌンティウスの本音を代弁させるためである。
- ④ 第三の理由は、セリヌンティウスの代わりに、メロスの言葉を受け止めさせるためである。
- ⑤ 結論、このように考えると…。

本文(原案)

太宰治の「走れメロス」は人間の友情と信頼を描く作品である。この作品は日本では教科書の定番教材をしていたり、ドラマやアニメなど映像化されたり、太宰治の代表作の一つと言える過言ではない。作品の主人公メロスは一時の感情的に用事を処理して、二年ぶりの竹馬の友人セリヌンティウスがメロスの身代わりに人質になっていた。三日目の日没まで帰らないとセリヌンティウスが殺されるので、メロスが走りし始めていく。その中に一番印象が深かったのはセリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場することである。作者はせっかくフィロストラトスという人物に名づけて、この人物の登場はきつと大切だと考えざるを得ない。またフィロストラトスとメロスとの会話は少しだけであるけれど、何か意味が含んでいるだろう。

第一の理由は、メロスの邪魔をさせて、物語を盛り上げるためである。王との約束をしてから、三日間にメロスは自然的や人為的などの様々な難関を当たった。途中で約束の時間が迫っていて、体や精神など大変疲れて、メロスは悔しく泣き出した。メロスが走り続けるかどうかと、一時に迷ってしまった。しかし、自分に信頼された竹馬の友人セリヌンティウスのため、走り続けなければならない。その信念を

本文(修正第一案)

セリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場しているのはなぜか。太宰治の「走れメロス」は人間の友情と信頼を描く作品である。

この作品は日本では教科書の定番教材をしていたり、ドラマやアニメなど映像化されたり、太宰治の代表作の一つと言える過言ではない。作品の主人公メロスは一時の感情的に用事を処理して、二年ぶりの竹馬の友人セリヌンティウスがメロスの身代わりに人質になっていた。三日目の日没まで帰らないとセリヌンティウスが殺されるので、メロスが走りし始めていく。その中に一番印象が深かったのはセリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場することである。作者はせっかくフィロストラトスという人物に名づけて、この人物の登場はきつと大切だと考えざるを得ない。またフィロストラトスとメロスとの会話は少しだけであるけれど、何か意味が含んでいるだろう。セリヌンティウスの弟子のフィロストラトスが登場している理由として三つのことが考えられる。

第一の理由は、メロスの邪魔をさせて、物語を盛り上げるためである。王との約束をしてから、三日間にメロスは自然的や人為的などの様々な難関を当たった。途中で約束の時間が迫っていて、体や精神な

持つので、倒れそうなメロスが走っている。その時にセリヌンティウスの弟子のフィロストラトスに合った。フィロストラトスの登場がまるで悪魔のように、メロスの信念を潰してきた。メロスの信念が左右するかどうかと、読者に汗を握っている。

第二の理由は、セリヌンティウスの本音を代弁させるためである。

メロスとセリヌンティウスは二年ぶりの友人なのに、死刑の人質に身代わりになっっている。それは誰でも納得できなくて、ありえないと考えるはずであろう。セリヌンティウスは文句を言わないけれど、実際にどう考えているのかと興味深い。この時に登場したフィロストラトスがセリヌンティウスの弟子なので、メロスとの会話はセリヌンティウスの本音を考えるだろう。

第三の理由はセリヌンティウスの代わりに、メロスの言葉を受け止めさせるためである。三日間の経験によって、メロスは最初の様子ではなく、自分に対しての不器用や友人に不慮の災難に合うことなど、後悔する気持ちが見える。友人に無駄の犠牲をしないように、いくらか難関にあっても諦めない信念を持つている。その信念や後悔する気持ちはフィロストラトスとの会話の中にちゃんと表されているだろう。

フィロストラトスはセリヌンティウスの弟子で、またセリヌンティウスとメロスは竹馬の友人である。そして、フィロストラトスとメロスとの会話は、各方面から見ると、フィロストラトスの登場はメロスに対して、大きい影響を与える。このように考えると、フィロストラトスという人物はこの作品に対して欠かせない役割だと言えるはずである。

ど大変疲れて、メロスは悔しく泣き出した。メロスが走り続けるかどうかと、一時に迷ってしまった。しかし、自分に信頼された竹馬の友人セリヌンティウスのため、走り続けなければならぬ。その信念を持つので、倒れそうなメロスが走っている。その時にセリヌンティウスの弟子のフィロストラトスに合った。フィロストラトスの登場がまるで悪魔のように、メロスの信念を潰してきた。メロスの信念が左右するかどうかと、読者に汗を握っている。

第二の理由は、セリヌンティウスの本音を代弁させるためである。

メロスとセリヌンティウスは二年ぶりの友人なのに、死刑の人質に身代わりになっっている。それは誰でも納得できなくて、ありえないと考えるはずであろう。セリヌンティウスは文句を言わないけれど、実際にどう考えているのかと興味深い。この時に登場したフィロストラトスがセリヌンティウスの弟子なので、メロスとの会話はセリヌンティウスの本音を考えるだろう。

第三の理由はセリヌンティウスの代わりに、メロスの言葉を受け止めさせるためである。三日間の経験によって、メロスは最初の様子ではなく、自分に対しての不器用や友人に不慮の災難に合うことなど、後悔する気持ちが見える。友人に無駄の犠牲をしないように、いくらか難関にあっても諦めない信念を持つている。その信念や後悔する気持ちはフィロストラトスとの会話の中にちゃんと表されているだろう。

このように考えると、フィロストラトスという人物はこの作品に対して欠かせない役割だと言えるはずである。フィロストラトスはセリヌンティウスの弟子で、またセリヌンティウスとメロスは竹馬の友人である。そして、フィロストラトスとメロスとの会話は、各方面から見ると、フィロストラトスの登場はメロスに対して、大きい影響を与える。